

概 要 報 告

実施期日	令和8年8月3日(月)
部 会 名	小学校 総則部会

研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善
(含む個別最適な学びと協同的な学びの一体的充実)

テーマ

『主体的・対話的で深い学びに向けた、こども一人一人に合った「基礎的環境整備」』

提案概要

提案校は授業時間外でも児童や保護者間のつながりが強く、アットホームな雰囲気が特徴である。一方で、仲の良さが構築されている反面、馴れ合いからか他者との活発な意見交流やその違いを認め合う活動が十分に行われていないという課題も見られる。学校教育目標である「いきいきと 心豊かに」の実現をめざし、学習・生活環境整備に努めながら、児童が自信を持って主体的に学び、個の考えをしっかりとつことで、対話的な学びを促進し、深い学びを実現することを目指している。

授業改善の具体的アプローチとして、「こどもレンズ」と「教科レンズ」の2つの視点を導入した。「こどもレンズ」とは、「この子」にとって意味のある授業づくりをするために、児童一人一人の実態や個性に応じて最適な学習環境や支援を設定する視点である。基礎的環境整備を「空間」「活動」「共同体」「人工物」の4つに整理し、一覧表に示すことで、全校で手立てを共有している。「教科レンズ」とは、学習指導要領の目標に基づき、目の前の「この子(たち)」の実態を踏まえ、育成したい資質・能力に応じた学習形態や展開を設計する視点である。目指す姿に迫るために、目の前の子供たちにとってどのような授業展開や場づくりが必要かなどを、学年やブロックで話し合いながら単元計画を作成している。

実践例として、1年生生活科「小学校の一日を園児に伝えよう」では、はじめての小学校で「知りたいこと」「やってみたいこと」が多く挙げられる意欲的な姿がある反面、個としての発想が多く、協同的に活動したり見通しをもって計画したりする言動があまり見られないという実態を踏まえ、1年生でもリーダーシップを発揮し、見通しや計画性をもって協同的に活動する姿を目指し、園児に小学校生活を伝える活動を設定した。これは、基礎的環境整備の「共同体」に当たる。実際に園児を小学校に招くと、進んで園児をリードする姿が見られた。その後、さらに小学校のことを知ってもらいたいという思いが子どもたちの中に生まれ、話し合いの末「小学校の一日を伝えよう」という発表会を開くことにした。子どもたちはグループに分かれ、内容を話し合いながら、協同的に準備を進めることができ、自信をもって発表会を開くことができた。「伝えたい」という思いがあったからこそ、子供たちが主体的に学ぼうとする姿につながり、その結果としてリーダーシップの芽生えや協働的な学びのよさを実感する子供たちの姿が見られた。

また、5年生社会科「未来をつくり出す工業生産」では、言われたことは一生懸命に取り組むが、一斉授業では学習に自分事として取り組むことが難しいという実態を踏まえ、自らが問いをもって学習に取り組んだり、学習方略を考えて実践しながら、仲間と考えを聞き合い、交流を通して自分の考えをよりよいものにしようとする姿を目指し、「未来の車を提案しよう」というパフォーマンス課題を設定した。これは、基礎的環境整備の「活動」に当たる。さらに、単元構成の可視化、学び方の選択、一単位時間の流れをミニレッスン→調べ学習→振り返りというサイクルで回すこと、学習空間の多様化などの工夫を行い、単元を進めていった。そうした中で、「学び方」を意識して、自ら調べる内容や問いについて学習する子供たちの姿が見られた。また、基礎的環境整備を意識した単元づくりを行ったことで、子ども一人一人が自分の学び方や学習状況を振り返りながら、主体的に学習に取り組もうとする姿が見られた。

成果として、教師が子ども一人一人の学びたいことや困り感を丁寧に見取ろうとする意識が強まり、子供たちが主体的に学べるような基礎的環境整備について考え、実践を積み重ねてきたことで、子ども一人一人の学習状況に目が行き届き、子供たちが主体的に学ぼうとする姿勢が多く見られるようになってきたことが挙げられる。一方で、子供たちが自ら取り組もうとする反面、学習を他の活動へ生かす姿

や、仲間とともに対話的に深めようとする姿があまり見られないという課題が見られるようになってきた。そのため、今後は基礎的環境整備をさらに充実させるとともに、仲間の考えに耳を傾け、よりよい学びを対話的に深める手立てを考えていく必要がある。

協議の柱及び協議概要

◎協議の柱

一人一人が主体的に学習に取り組めるように、どのように環境設定をしているか

○協議概要

小中連携の観点から、湘南三浦地区の小中学校の先生が混ざるよう事前に座席指定を行い、2～3名の小グループで協議を行った。協議のキーワードは「一人一人に合った学習空間の設定」「他者意識」「個別最適な学び」とした。各グループでそれぞれの観点について互いの実践を伝え合い、活発な意見交換の場となった。

あるグループの協議報告では、環境設定としてのグループ活動が話題の中心となった。小グループでの活動を意図的に取り入れることで、大人数や全体の前では自分の意見を発信することが難しい子も、少人数の中でなら発言できる子もいる。しかし、すべての教科や学習において小グループを取り入れることは難しい。「小学校では比較的小グループでの活動は取り入れやすいが、中学校ではなかなか日常的に小グループを取り入れることは難しいので、総合を活用して小グループの活動を設定し、課題に向かって安心して主体的に学ぶことができるような学習環境をつくっていきたい」との声も聞かれた。

また、別の協議報告では、単元構成を考えることが環境設定につながるとの発表があった。具体的には、国語科の物語文の学習において、いきなり物語を読み始めるのではなく、児童とともに問いを立ててから読み進めたり、単元の終わりの振り返りの時間をじっくりと取り、「何を学んだのか」、そして「次の学習にどう生かしていきたいか」を自分の言葉でまとめる時間を確保したりするなど、子どもたちが主体的に学ぶための単元構成のアイデアが共有された。

まとめ概要

学習指導要領では、児童に必要な資質・能力を育成するために「主体的・対話的で深い学び」の視点で授業改善を図ることが重要であると示されている。つまり、私たち教師が考えるべきことは、「どんな活動を取り入れるか」に加えて、「その環境によって子どもにどのような学びが生まれるか」という視点である。

本提案のキーワードは、「こどもレンズ（児童の学びの姿を見取る視点）」と「教科レンズ（育むべき資質・能力を踏まえて授業を構想する視点）」の二つである。単に手立てや環境を整備するだけでなく、二つの視点を相互に行き来させることで、真に子どもを主語とした「主体的・対話的で深い学び」に迫る具体的な授業改善が全校的な視野でなされていた。

今後も、子どもの姿を見取り、教師の働きかけを見直し、また子どもの姿を見る、という往還を繰り返す授業改善の形を全職員で継続し、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で実現できるよう、研究を深めていくことが望まれる。また、協議に参加された各校においても、ただ環境整備をすればよいのではなく、その環境整備を通して子どもにどのような学びや姿を期待するのかを「子どもの視点」「授業者の視点」を行き来しながら実践する姿勢を大切にしていってほしい。